

# 国際口承文芸学会

## 第十六回大会参加報告

丹菊 逸治

二〇一三年六月二十五日(火)から二十九日(土)までリトアニア共和国ビリニユス市で第十六回国際口承文芸学会(JSEFNR 2013)が開催された。

前回のアテネに続いて、ヨーロッパの古都での開催である。リトアニアは人口三二五万人。一九〇〇年にラトビア、エストニアとともに旧ソ連から独立を回復した「バルト三国」のひとつである。

バルト三国はお互いに全く異なる言語を国語とする。なかでもリトアニア語は印欧語族の中でも古風な特徴を保っているといわれ、言語学者の注目を集めてきた。ロシアやポーランドなどの強国の影響を受けながらも、独自の文化様式も守り続けている。今回の開催地となったビリニユス市はリトアニアの首都であり、都市圏の人口はおよそ八五万人。決して大きくはないが旧市街はまさに古都というにふさわしく美しい街並みが保存されている。丘の上には「ゲティミナス城」も復元・整備され観光地としても有名である。なお城の一角にあるゲティミナス

塔は破壊されずに残っていたものである。ロシア系国民の一部はリトアニア語が苦手だという話も聞かすが、ビリニユスの街中ではそこそこ英語が通じるので特にコミュニケーションに支障はない。

### 大会会場

大会が開催されたビリニユス大学は旧市街に位置する。必ずしも大きくはないが、一五七九年創立の歴史を誇る、ヨーロッパ最古の大学の一つである。今大会の使用言語は英語であり、大会運営もリトアニアの研究者による研究発表も全て英語であった。今回は世界各国からおよそ二四〇組の発表があった。各二十分の発表と十分間の質疑応答である。ただ、会場には余裕があるため司会の取り計らいによって時間には多少の融通がきく。

国際学会の例にもれず参加費は若干高め(当日参加三五〇ドル)だが、その代わりレセプションやホテルの手配などは旅行会社が請け負っているようで、非常にスムーズだった。ビリニユス大学の人文学部は古い歴史があるが、数百人規模とはいえない国際学会はなかなか開催できないようで、今大会もその意気込みが感じられるものとなっていた。

オープニングセッションは十一時三十分からビリニユス大学のシアターホールで行われた。リトアニア共和国文部科学省ダ

イニウス・パヴァルキス大臣に続いて、ピリニウス大学ジュエラ・バニス学長、リトアニア・リサーチ・カウンシルのルータ・ペトラウスカITE副議長、リトアニア文学・口承文芸協会のミンダウガス・クヴィエトカウスカス会長、ISENRのウルリヒ・マルツォルフ会長が次々にあいさつを述べた。文部科学大臣の列席からも、今大会への力の入れようが分かる。続いて十四時三十分から十六時三十分まではマルツォルフ会長、ヴィルモス・ヴォイクト氏、ギエドレ・シュミテイエネ氏らによるプレナリーセッションがおこなわれた。続いて五時から研究発表大会が開始された。最近の流行どおりに、予稿集がB4判サイズの単行本形式にまとめられていたのは便利だった。そのまま報告書として図書館に納本もしやすい。ちゃんとISBNも付されている。国際学会では残念ながら発表キャンセルがしばしばある。そういう場合でも研究者と研究テーマにかなする情報が得られる予稿集は重要である。(以下発表者名および発表タイトルは原語表記とさせていただきます)。

## 大会概要

大会は四日間、八会場に分かれていた。今回の主要テーマは次の六つである。

「Narrative Genres (語りのジャンル)」(八回のセッション)  
「Nomo Narrans (ホモ・ナランヌ)」(二回のパネルと五回の

セッション)

「Folk Narrative & Social Communication (民間の語りと社会的コミュニケーション)」(八回のセッション)

「Crossing the Boundaries (境界を越えて)」

「BNN symposium: Alternative Beliefs: From Vernacular Narratives to Practices (BNNシンポジウム：民間信仰：土着の語りから実践まで)」(五回のセッションの合間に三回のパネル)

「Charms symposium (呪文のシンポジウム)」(七回のセッション)

これらは基本的にそれぞれ同じ会場を毎日使用し、数回のセッションに分けられて発表と討議が行なわれた。各セッションは三〜四組の発表および必要に応じてパネルで構成される。この六テーマのほかに、残り二つの会場では次の九つのミニ・テーマがさらに並行して行われた。

「The Litvaks: Perspectives on The Folklore of The Jews of Lithuania (リトマニア国内ユダヤ人の伝承)」(二回のパネル) および 「Narrating The Litvaks Today (今日のリトアニアのユダヤ人を語る)」(ラウンドテーブル・ディスカッション)

「Folk Narrative in The Modern World: Computers and The Internet (近代世界における民間伝承：コンピュータ

リネット)」「(二回のパネル) および「Folk Narratives & Modern Technologies」(三回のセッション)

「Did I Tell You about This Horse Radish? Stories of Local Food Culture (地域の食文化にかんする物語)」(一回のパネル)

「Child-Lore and Youth-Lore (子どもや青年たちの伝承)」(一回のパネル)

「Folklore IN/AND Translation 翻訳論」(二回のパネル)

「Gender and Identity in Fairy Tales by Women Writers (女性作家による妖精昔話におけるジェンダーとアイデンティティ)」(一回のパネル)

「Theorizing Enchantment (魔法の理論化)」(二回のパネル)

「Listener/Witness:Narrative Serialization across Time, Place and Emotion (聞き手／目撃者：時間と空間と感情にまたがる語りの連続性)」(一回のパネル)

「Why Should Folklore Students Study Dead Legends?」(ラウンドテーブル・ディスカッション)

テーマごとに分けてあるにせよ、研究が多様化している現在ではセクションと発表タイトルだけでは内容は必ずしも予測できない。今回のような充実した予稿集は必須であると感じた。また、四日間とはいえず、参加者が多いためにパンしても同じ時間には発表が重なる。

## 「Charm (呪文)」

今大会で注目されたのはまず主要テーマの一つとして設定された「Charms (呪文)」である。四日間を通じてセクションが設けられた。いわゆる「昔話」や「叙事詩語り」といった狭義の「口承文芸」が世界的に退潮しているのは紛れもない事実である。だが一方で広義の口承文芸は必ずしも消えつつあるわけではなう。今回とりあげられた「呪文」は世界各地でまだまだ活発な文化である。理論的な研究、文献の再評価、さらに新たな資料の採録までさまざまな報告があった。例えば Lea Olsan 氏(英)による「From Literary Text to Performative Ritual」Charalampos Passalis 氏(ギリシア)による「From Written to Oral Tradition: Survival and Transformation of St. Sisinnius Prayer in Oral Greek Charms」、Jonathan Roper (オーストラリア) 氏による「Two Significant Charms Archives Compared and Contrasted」などである。現在でも活発に行われている例としては Rajketan Singh Chitrom 氏(インド)による「Tradition of Charming among the Meiteis of Manipur」や Sadananda Singh Mayanglamban 氏(インド)による「Supernatural Encounters in Belief Narratives among the Meiteis of Manipur」などインドのマニプル州の呪術にかんする記述的研究発表があった。この地域では呪術

も超自然的存在への対応も、現在活発におこなわれている同時代の現象である。同じ地域を対象とした発表が複数開けるのも大型の学会の醍醐味である。口承文芸研究においては理論的な研究も重要だが、まだまだ資料の採録がおこなわれなくてはならない。特にアジア地域の実践報告はこれからも充実してることが予想される。

インドのように民族独自の言語や伝統文化が強く残っている地域ばかりではない。話者が減少しているいわゆる「危機言語」の地域においてもそういった「呪文」文化は残っている。日本からは永山ゆかり氏のアリュートル語の「昔話」自体が病気や怪我の治療のための呪文として用いられるという報告がなされた。今大会では旧ソ連圏のうちシベリアにかんする発表は必ずしも多くなかったが、こういった今まで知られていなかった現象についての報告があったことは嬉しい限りである。

リトアニアやベラルーシには呪文にかんする伝統文化が非常に色濃く残されているらしく、数多くの発表があった。地元ならではの発表といえる。なかでもJulija Ladygiene氏(リトアニア)の「The Charmer and the Divine: Who is Who in Magical Communication」はシャAMANISM治療を対話モデルによって再検討する試みの紹介である。従来のモデルではシャMANは媒介者として超自然的な力を被治療者に与えるだけの存在として位置付けられがちだった。だが、実際には治療行為はシャMANと被治療者、さらに高次の存在の相互作用として考え

ることができる。これら呪文やシャAMANISM治療行為をコミュニケーション的観点から分析しなおす研究は今後の展開が楽しみである。質疑応答も非常に活発で、関心の高さがうかがえた。

### 「Homo Narrans (ホモ・ナランス)」

### 「Narrative Genres (語りのジャンル)」

特定のジャンルではなく、広く「口承文芸とその外部」にかんするテーマも取り上げられた。例えば「口承文芸と観光」は世界的なテーマといえるが、「Narrative Genres (語りのジャンル)」などいくつかのセッションで発表があった。Thomas Hovi氏(フィンランド)による「Old Narratives Finding New Life through Tourism」はルーブニアにおけるドラマキュラ説と観光のかかわりについての発表である。必ずしも斬新な切り口が用意できるわけではないが、伝承の現代の変容の一種として見過ごすことはできない。日本からも斉藤みほ氏や竹原威滋・岩瀬ひさみ氏らの発表が同じ問題意識を共有していた。

もちろん、口承文芸の形式にかんする記述的研究も健在であり、発表は基本的にセッション「Homo Narrans」にまとめられていた。Karina Lukin氏(フィンランド)による「The Grammar of Moving between The Worlds in Nenets Epic Poetry」はロシアのネネツ民族の叙事詩における空間移動の表象にかんする、基礎的な資料をまとめた研究発表であった。

もちろんネネット語テクストをスクリーンに映写しての文体分析である。壮大な叙事詩の内容を真正面から取り上げるもので、二十分では若干時間が不足する力の入った内容だった。日本からは奥田統己氏による、アイヌ叙事詩のリズムとアクセントにかんする韻律分析の発表があった。Efrat Miller氏(イスラエル)によるリトアニア語文法と文体の相互関係の研究「Relationship between The Lithuanian Relative Mood and The Genre of Padavimai (Historical Legends)」など、言語学と重なる発表もちらほらあった。一見地味だが、そこから得られる成果はさまざまに応用がきくことが予想される。Mari Kasik氏(エストニア)による彼岸訪問譚の移動表現にかんする研究「A Mortal Visits The Otherworld: Relativity of Time in Fairy Tales」も興味深い発表だった。空間と移動にかんする表現をキーワードに言語と物語を結びつけていく研究は、自然科学分野における認知科学研究の進展とも無関係ではないだろう。こちらも今後の可能性を感じさせるものだった。

### 「Crossing The Boundaries (境界を越えて)」

#### 「Livaks (リトアニアのユダヤ人)」

欧州での開催とごう(ごう)でもあり、ヨーロッパの口承文学研究の発表も多かった。なかでもセッション「Crossing The Boundaries (境界を越えて)」では、地域的には Rosa Thorsteinsdottir氏

(アイスランド)による「The Fate of AT 556: Icelandic Tale Types in the International Context」から Bela Mosa氏(トルシヤ)による「Symbols of Fire in Georgian Folklore in Comparison to the Global Experience」などの諸発表にみるように広範囲をカバーし、さらに日本の鶴野祐介氏による津波にかかわる語りの研究、Elizabeth Rainey氏(UAE)による「The Art of Storytelling in Emirati Society: a Twenty-First Century Ethnographical Collection of Poems and Tales from the UAE」などUAEでの最新の伝承採録資料の研究など、ヨーロッパとの比較研究から一歩踏み込んで可能性を探るものとなっていた。日本からは間宮史子氏のグリム童話集の日本での受容にかんする発表があった。なお比較研究のうち、翻訳を主とした発表にはセッション「Folklore IN/AND Translation」として独立したセッションが設定された。日本からは横道誠氏、野口芳子氏の発表があった。

地理的に近いこともあってか、フィンランドからの研究者を中心にとしたよるパネル「Homo Narrans, Mythic Knowledge and Vernacular Imagination I/II/III」も注目された。Lotte Tarkka氏(フィンランド)による「The Making of Mythic Realms: Negation and Vernacular Imagination」Irma-Riitta Jarvinen氏(フィンランド)の「Functions of Saints in Mythic Spaces」などである。現在でも民間からのノート蒐集が続けられているフィンランドの底力を見せつけられた思いであ

る。日本では「カレワラ」ですらあまり広く知られていないと言い難い。だが、フィンランド語を始めとするウラル語族は広い地域に広がっており、その口承文芸研究も大きな蓄積がある。先にふれた Karina Lukin 氏の研究もそのひとつである。現在でも学ばべき部分は大きい。

またユダヤ口承文芸をとりあげたセッション「The Litvaks: Perspectives on The Folklore of The Jews of Lithuania (I. Vinius Ilighuania and Beyond)」が行なわれた。この注目をすべく、Galit Hasan-Rokem 氏・Dani Shrire 氏（ともにイスラエル）による「The Litvaks: Perspectives on the Folklore of the Jews of Lithuania」Dan Ben-Amos 氏 (USA) による「From Rudashevsky to Sutskever: In Search of the Ghetto Vilna Folklore」などリトアニア外の研究者による研究発表で構成されていた。「ソ連による抑圧の被害者」を大きな物語とするリトアニアにとつて、国内少数民族であるユダヤ人をとりあげることが、当たり前のこととはいえ、高く評価したい。ロシア極東にはソ連時代に「ユダヤ民族の自治地域」として建設されたビロビジャン州も存在する。日本における研究の進展にも期待したい。

## 新たな傾向

技術革新を反映したパネル「Folk Narrative in The Modern

World: Computers and The Internet I/II」も行われた。Theo Meder 氏 (オランダ) による「A Scientific Folklore Database Should Be More Than an Online Museum of Stories」や Christoph Schmitt 氏 (ドイツ) の「Belief Narratives in Online Databases: Retrieval Scenarios and the Problem of Internationally valid Indexing. Based on the Example of the WossliDA Project」など Violetta Krawczyk-Wasilewska 氏 (ポーランド)・J.Andrew Ross 氏 (ドイツ) による「Global Cooking Stories and the Internet」などネットにかかわる発表が目立ったパネルであった。日本では一段落した感があるが、それは日本の IT 文化が若干先行していたせいもある。日本以外の国々を考える限り、この分野は今後ますます注目となっていくであろう。

「Child-Lore and Youth-Lore」などいくつかのセッションではリトアニアをはじめとするバルト三国からの発表者が大勢を占めていた。内容的にも充実しており、国内からの参加者が英語で行なわれる国際学会を盛り上げてくれるのは嬉しい。今回の大会では、ロシア語・ドイツ語の話者も大勢参加していたはずだが、全ての発表・議事進行が予告通り英語で行われた。スタッフも全員英語を話せた。リトアニアの若い研究者（学生たち）にとつても、リトアニアの口承文芸・伝統文化研究を英語で発表するいい機会になっているはずである。なんでも英語がよいというわけではないが、海外との研究交流には重要なこと

であろう。

「英語」で運営されるからといって、内容が粗雑になるはずはない。現に今回の発表ではナラティブ研究の勢いも見過ごせない充実ぶりだった。いうまでもなくナラティブ研究では、その地域の言語に精通することが重要である。今回もネット上のナラティブから文献の見直しまで幅広い発表があった。私見になるがネットの影響はやはり大きいようである。そこでは「語る」と「書く」の境界が必ずしも自明ではない。ナラティブ研究が「口承」「書承」の枠を越えた研究テーマであることを再認識した。

新たな時代のアーカイブ、つまり資料蓄積へのIT技術の応用にかんする討論セクシオンも大変な盛り上がりを見せていた。「Why Should Folklore Students Study Dead Legends?」という、いさゝか過激な（しかしありふれた悩みでもある）タイトルを掲げたラウンドテーブル・ディスカッションの後半の議論がそれである。日本でも大規模な文献・音声資料の電子アーカイブの試みがいろいろな方面で研究されているが、国際的にもほぼ同じ問題意識があることを改めて認識させられた。電子アーカイブの現実的な問題認識は比較的共有されており、必ずしも楽観的な論調ばかりではなかった。技術進展により蓄積の速度はどんどんあがっているが、分析が追いつかない。これは世界中どこでも同じである。技術に目を奪われることなく、着実に研究を進めて行くのではないか、というきわめて常識的な

見解が次々に表明されたのは心強い限りだった。狭い会場に詰め込まれて長時間討論すると多少すぎすぎした雰囲気になるが、むしろ本音が出てくるいい機会だったように思われる。激しいながらも後味が悪くならない、大会の最後を飾るにふさわしい、雰囲気のない討論会だった。

今大会では日本からの参加者が比較的多かった。本学会を中心におよそ九組の発表があった。参加者と発表タイトルは次のとおりである（予稿集による五十音順）。また、ほかに海外の大学からの日本人研究者の参加もあった。

- 鶴野祐介「Stories for Calling Soul: roots of the Strangers  
Appearing in Japanese Folk Narratives Related to  
Tsunami」  
奥田統「Syllable Number Orientation and Accent Orientation  
in Ainu Epic Versification」  
斉藤みほ「The Social Significance of Narrative and the Current  
State of Folktales in Modern Japan」  
竹原威滋 岩瀬ひろみ「How Can We Hand down the Traditional  
Folktales of the Area to the Future Generations?  
Examples: Nara Folktales Festival and Nara Folktales  
Walking Map」  
丹菊逸治・篠原智花「Transformation from Individual Art to  
National Art in Ainu and Nivkh」

永山ゆかり 「Protective and Harmful Charms of Native People  
in Kamchatka: Tradition, Practice, and Transmission」

野口芳子 「Influences of Victorian Values in Japanese Grimms'  
Fairy Tales Used by English Translations」

間宮史子 「Grimms' Fairy Tales in Modern Japan」

横道誠 「The Japanese Version of ATU410 (Nemureru Mori  
no Bijo)」

エクスカーションなど

以上簡単にご紹介したとおり、研究発表は非常に充実したものであったが、その活動やエクスカーションと古都ビリニユスでの滞在についても是非ふれておきたい。

まず、書籍展示・販売コーナーだが、思ったより小規模なものとなっていた。展示されていたものも、多くは同時にネット公開されている。口承文芸研究は必ずしもそれぞれの国内ではメジャーな学問分野ではない。今後もネットの利用は拡大していくと思われる。

二十七日のエクスカーションでは、参加者はビリニユス・アカデミー・オブ・アーツのゴシック様式ホールでリトアニア民族音楽の夕べに招待された。五人のプロフェッショナルの民族音楽家グループ「Trys keturiše」および愛好家・研究者のグループ「Dijuta」による、ポリフォニー形式のリトアニア伝

統歌謡である。現代風のものもあれば、古楽を復元したのもあり、音楽家であると同時に研究者でもある、という彼らの実力には感心させられた。現在では地元地域でも伝統が途絶えた民族音楽もあり、それを保存しているのが彼らである。前者は一九八一年、後者は一九七九年から活動している。

ビリニユス市域、特に旧市街は歩いて回っても十分楽しめる。小さな商店がいくつもあり、観光客を相手にするのも慣れていいる。あちこちに過去に滞在した文化人の名が刻まれており、文化都市としての誇りがうかがえる。

近郊の町に行くにはバスが便利だが、さすがに一日や二日で回れるほど小さな国ではない。バルト三国の他の二国エストニアとラトビアをまわるとなると、少なくともさらに数日は必要となる。今回の大会ではビリニユスの旧市街の真ん中にあるビリニユス大学だからこそその滞りが楽しめた。口承文芸はその土地の伝統文化と切り離せないものである。その場へ行くことで具体的なイメージもわく。長期間の国際学会参加はなかなか困難だが、今後とも日本からの積極的な参加を期待したい。

(たんぎく・いつじ／北海道大学アイヌ・先住民研究センター)